

ひとりの学生の記録

東京都 池 亀 亮

一 佐渡から奉天（瀋陽）へ

私は昭和二（一九二七）年の十月、仙台において、中学校教師の家の次男として生まれた。二歳になったときに、父が新潟県立佐渡中学校の教師として転任したので、家族一同は父に従って佐渡ヶ島に渡り、河原田町というところに住むことになった。河原田とは国中平野の西南にあつて、現在は佐和田町に含まれているが、砂浜の続く風光明媚な真野湾に面した静かな町である。

私はここで小学六年生の一学期までを過ごしたが、小学校に入学したときの担任の先生は女教師で、その先生は生徒一人一人を姓だけでなく正しい名前までを、ちゃん付けで呼んでいたことが、懐かしく思い出される。勉強の方はあまり記憶に

ないが、夏休みには終日泳いだり魚を捕ったりして、真っ黒になって遊んでいたことが鮮明に記憶に残っている。

父が満州に行くことを思い立ったのは、いつごろからか定かでないが、新興国満州という新天地について熱っぽく話すのを度々聞かされて、子供心にもわくわくしたことを覚えている。それが現実のことになって、父、母、兄、それに四人の妹と一人の弟の、一家九人の大世帯が佐渡を離れたのは、昭和十四年の夏であった。

一家はまず新潟市に出て、新潟港から連絡船で朝鮮の清津に渡り、ここから汽車を乗り継いで、父の新しい赴任地である奉天に着いた。住まいは日本人居住区の大和区藤浪町であった。この大旅行においてまだ乳飲み子だった、ただ一人の弟、絃がこの長旅によって起こした下痢がもとで栄養失調になり、奉天に着いて間もなくこの世を去るという、悲しくも痛ましき出来事があった。

私は、家から近い高千穂小学校の六年生に編入

されたが、同級生はみんな都会育ちらしく大人びて見えて、少々劣等感を味わったが、特に転入当座は標準語が話せなかったので、恥ずかしい思いをしていたことを覚えている。勉強の方は、田舎から出て来たわりにはそんなに差はなかった。

翌年春、高千穂小学校を卒業して奉天第二中学校に入学し、それから昭和十九年三月に四年間の中学生生活を終えるまで、他の中学生と同じような生活を送っていた。中学校での記憶といえば、学業面のこととはあまりなく、軍事教練や完全武装での行軍、それにグライダー部で活躍した思い出ばかりである。やはりそのころの世相を反映していたのかもしれない。

同年四月には、目標どおり旅順高等学校に合格した。高等学校生となった私は、生まれて初めて親元を離れて寮生活をするようになった。当時は、太平洋戦争ももう末期ではあったが、最初の一年間は正規の授業が行われていた。もちろん、しばしば勤労奉仕などに駆り出されていたが、

けっこう勉強をしていたものだった。

しかし、昭和二十年四月、二年生になるとすぐに学徒勤労動員が始まり、我々のクラスは全員寮から出払ってしまった。私自身は、都合によってしばらく学校に残ることになり、みんなから数カ月遅れて大連にある満鉄中央研究所に動員されることになった。

この間、私の家族にも大きな転機が訪れていた。まず、父は定年に近いこともあって、このころになると第二の人生をいかに過ごすべきかと毎日考えていたが、幸いに佐賀県に父の気に入った新しい職場が見付かり、転職することを決めていた。

私と一つ違いの兄は、昭和十九年に旅順工科大学の予科に入学して、私と同じ旅順にいたので、家族は兄と私の二人を満州に残して、昭和二十年の春に奉天を離れた。そのころはこの大戦も末期症状となっていて、日本列島の周辺にはアメリカの潜水艦が至る所に出没していて、船による旅は

危険極まりないことであつたが、両親はじめ家族一同は神仏の加護によつて無事に内地に着いたが、別送していた家財道具は、ついに家族の手に渡ることがなかつた。私と兄は、知り合いの家に下宿することになつた。

動員先の満鉄中央研究所では、戦局が極めて緊迫しているにもかかわらず、特別にどうという緊急な仕事もなく、比較的自由に勉強ができた。また、仕事の性質上かなり自由に短波放送を聞くことができたので、八月六日に広島に新型爆弾といわれた原子爆弾が落とされたことも知らされて、戦争はいよいよ大詰めになつてきたと思わざるを得なかつた。

八月九日には、日ソ不可侵条約を一方的に破つてソ連軍が参戦して、北滿各地への不法侵入開始によつて日ソ戦争も始まり、にわかには戦争が身近なものとなつてきた。八月十日だつたと思うが、文科系の連中も召集されて、それを見送つたこともあつた。しかしこのときに至つても、まだ自分

自身が召集されようとは、夢にも思つていなかった。

二 第二国民兵の召集

その日八月十二日は、たしか日曜日だつたと記憶しているが、下宿で朝食を済ませて、散歩がたりに近くの友人の家を訪ねた。玄関を開けると、友人は上がりかまちに腰を下ろしてゲートルを巻いていた。驚いた私はその理由を聞くと、友人も私の散歩姿に驚いて、「旅順高校生は、旧大連駅に集合しろという指令がきている。おまえのところには連絡がなかつたのか？」と言う。それを聞いて私もびつくりした。連絡はなかつたが、行かないわけにもいかないと思ひ、急いで下宿に戻つて、家人に「急な仕事かもしれない。落ち着いたら連絡します」と言い残して、奉公袋を抱き、ゲートルをポケットに突っ込んだ姿で下宿を出た。それつきり、二度と再びここに戻ることはなかつた。金も持たずに飛び出したので、後々、みんなに迷惑をかけることになつたが、そのときは

考えもつかなかった。

そのまま友人と市内電車に乗って、旧大連駅に向かったが、停留所に止まるたびに軍服を着た人がどんどん乗ってきた。中には軍刀を持った人もいて、一見して再召集というような感じの人たちで、やはり戦局が急迫してただならぬ状況になっていることがひしひしと感じられた。そのときは、「軍は古年兵も再召集しているのだなあ」と、人事のように思っていた。二人共、「旅高生は旧大連駅に生まれ！」というの、何か新しい仕事をさせるのだろうかぐらいに思っていた。

旧大連駅に着いてみると、同級生が大勢集まっ
ていて、一種異様な雰囲気であった。周囲から、
「どうも召集らしい？」という言葉が聞こえてき
た。召集とは青天の霹靂であった。旧大連駅の
ホームから、一同は無言を言わず列車に乗せら
れた。

当時、徴兵検査は十九歳で受けることになって
いた。私と一つ違いの兄は、前年に徴兵検査を受

けていたが、理工科系だったので徴兵猶予となっ
ていた。このような事態になっているのだから、
私もいづれ召集されるだろうが、それにしても兄
が先で私はそのあとになるはずだと思っていたの
で、全く予想外のことだった。後日聞いた話で
は、徴兵猶予ということは勅令事項であり、現地
の一軍司令官の一存では召集することはできない
とのことだった。私たちは、検査前ではあるが兵
役法上では第二国民兵になっていて、軍としては
必要に応じて、いつでも現地で召集を命ずること
ができるという事だった。

いづれにしても、召集ともなれば、この戦局で
は生きて再び帰ることはあるまいと覚悟を決めて
いた。しかし心の整理はできていなかったし、家
族の誰にも会えず、別れの言葉一つもなしに死ん
でしまうということは、耐え難いことであった。
また学友も、だれかれとそれぞれ思いの差があっ
ても、一様に割り切れない気持ちを持ったまま列
車に乗せられていた。列車はこうして乗っている

者の気持ちなどとは無関係に、北に向かつて走り出した。

列車が北上するにつれて、北に向かっているのは、この列車だけのように思われてきた。北からは、避難民を満載した列車が次々と擦れ違った。負傷した人もいるらしく、水を求める声も聞こえていた。いよいよ死が近づいてきていることを実感するようになってきた。

旧奉天駅を出発して三日目、忘れもしない八月十五日の朝、列車は東満の朝陽鎮チョウヨウジンという駅に着いた。入隊する部隊は、そこからさらに三十キロメートルばかり離れた、金川という町に駐屯する部隊であったが、その部隊は既に移動してしまつて、蛻もぐりの殻であることが分かった。

この日の十二時に、重大放送があるから全員聞くようにとの連絡があったが、朝陽鎮の駅舎には古ぼけたラジオが一台しかなかった。列車には古参兵も多く、この連中がラジオの前を占めてしまい、私たち即席新兵はうしろの方に集められたの

で、何も聞こえなかった。前で聞いていた古参兵も、明瞭には聞こえていなかったらしく、「戦争は終わった」「負けたらしい」と聞いた人と、「まだこれから戦うのだ」と聞いた人とが半々で、どちらの言い分が正しいのか、どっちを信じていいのか分からない状態であった。しかしどちらにしても大変な事態が、私たちを待っていることだけは明白だった。

やがて朝陽鎮から反転して、軍司令部の所在する四平街に向かった。そこで正式に入隊するという話になったが、そのころにはこの戦争は負けたことがはっきりしていたし、私たちも認識していたので、戦争が終わつたのに、これから兵隊として入隊するということには納得できなかったし、大きな不安もあった。

八月十八日になって、全員練兵場に集合させられた。ここでも古参兵が前列を占めていて、私たちは後方にいた。その日は天気は良かったが、風の強い日で土ぼこりがひどかった。軍司令官が台

上にながって訓示をしたが、前の方にいる古参兵たちの中では泣いている人もいた。しかし後方にいる私たちには、何を言っているのか全然聞こえず、何の訓示か分からなかった。

古参兵の説明では、軍司令官が「あとはおれたちが引き受けた。おまえたちはこれでそれぞれの家郷に帰れ」という内容の訓示であることを知らされた。それを知って、私はほっと安堵の胸をなでおろしたことを記憶している。そして新品の軍靴が支給されたが、これは大変に有り難かった。さらに酒保が開放されて、酒や甘味品が自由に持ち出されて、久しぶりに腹をふくらませたものだった。

その夜には、四十数両の無蓋車で編成された列車が準備され、兵隊たちを乗せて南に向かって四平街をあとにした。

私たち第二国民兵の乗った無蓋車は、列車の真ん中よりやや後方に位置していて、はるか前方に先頭の機関車が見えて、ときどきポーツと火の粉

を吹き上げていた。珍しく雲一つない月明かりの下、見渡す限り広大な高粱畑コリアンを走っていた。長さが日本の無蓋車の倍もあるような大きな無蓋車であったが、その真ん中に、開放された酒保から調達してきた酒樽を置き、その周りに古参兵があらぐらをかいてコップ酒を飲んでいた。私たちは座る場所もなく、隅の方で立ったままこの酒盛りを眺めていた。そのうちに酔いが回ってくると、古参兵たちは手拍子を打って故郷の民謡などを歌い始めた。再召集の無事解除を祝っているのか、はたまた、前途の不安を忘れるためなのか、恐らくその両方の意味が込められているのだろうが、敗戦と酒盛り、この奇妙な情景は、月明かりの大平原と共に忘れることができない。

八月十九日の朝、列車は奉天のすぐ南にある蘇家屯の操車場に入り、そこで半日ほど止められた。後日知ったことだが、その日には奉天の西側からソ連軍が侵入して来て、奉天を完全に占領した。同じ日に、除隊となって私たちのあとの列車

で南下してきた一隊は、奉天を通り抜けることができずに、一カ月ほど列車の中の生活を余儀なくされたとのことであった。私たちの列車は、運良くソ連軍の鼻先を通過したのであった。

私は、住み慣れた奉天では降りずに、大連まで行くことを考えていた。奉天で降りても住む家はないし、ソ連軍に占領されている混乱状態のことを考えれば、大連の方がはるかに治安が良いだろうし、それに日本本土に一番近い港でもあるので、帰国のチャンスもあるだろうと判断したからである。その決心をしたもう一つの理由は、同じ無蓋車に乗っていた大連に長く住んでいた友人のK君が、熱心に誘ってくれたことも一因で、K君の家に厄介になることにしていたからでもある。もし奉天で降りていたら、予想されない多くの危険が待っていた可能性は否定できない。いろんなことがあったが、翌二十日の朝には、列車は無事に大連駅にたどり着いた。

三 ソ連兵の暴挙

八月二十日の朝、大連に着いてすぐに、将来の復学に備えて、旅順高等学校の在籍証明をもらっておくことが必要であると思いついた。今落ち着いて考えると、いつソ連軍が侵入して来るかわからないときに、在籍証明を得るために三十数キロメートルも離れている旅順まで行くなどは、危険極まりない暴挙であったが、そのときは大まじめであった。

二十一日の朝、通常どおり運転されていた大連発旅順行き列車に飛び乗った。途中変わったこともなく旅順駅に着いた。駅の改札口付近には日本軍の憲兵がいて、以前の如く、通行中の若い者を調べては殴っていたし、旅順高校では学校職員が出動していて、ちゃんと在籍証明書を発行してくれた。「本当に戦争に、負けたのだろうか？」と、疑問に思うくらいだった。

用事を済ませたので大連に帰ろうと思い、旅順駅に行くと、乗る予定にしていた列車がなかつ

た。仕方がなく駅の近くの安宿に一泊することにしたが、この安宿のひどいこと、ひと晩中南京虫に食われ通しで、体中が赤くはれ上がってしまった。二十二日の朝には、大連行き列車が予定どおり発車し、やつとの思いで夕方までにK君の家に戻った。

翌日の二十三日、大連はソ連軍によって完全に占領されて、K君の家にある静浦地区の近くにも、ソ連軍の戦車がやってきた。戦車は大砲の先を上に向けて走っていたが、その高さは、道路の両側に立ち並ぶ家の二階ぐらいで、キャタピラーの幅は約三十センチメートルもあろうかと思つた。その巨大な戦車が、時速五十キロメートルぐらいの速度で電車通りを走るので、電車道の敷石は次々と派手に跳ね飛ばされていた。日本軍の小型の戦車しか見たことがない私には、想像を超えた怪物のように思えた。これでは戦いに勝てるわけがないと、妙に簡単に納得してしまった。その戦車に乗っているソ連兵は、子供みたいに若い者

とか、見ただけですぐに蒙古人と分かるような兵隊たちで、みんな腕には俗に言われている、マンダリンという自動小銃を抱えていた。

戦車隊は、K君の家からあまり離れていない大連第三中学校の校庭に入って行つた。これから何が始まるのか、だれもが不安に包まれてその動向を見守っていた。案の定、その晩から略奪が始まった。そしてそれは、私たちが帰国するまでの短くて長い、そして耐え難い毎日の生活の幕開けであつた。

そのころ、私が初めて覚えたロシア語を今でも忘れていない。それは、「ウナース、ウタシーリ、チャスイ、イ、チェモダン」という言葉だ。チャスイとは時計のことで、チェモダンとはトランクのことである。つまり、「時計もトランクも、ソ連兵に持って行かれた？」という意味である。

ソ連兵の略奪行為はひどかつた。白昼、街中で通行している人を、だれかれの見境なく手当たり次第に捕まえては、「ダワイ、チャスイ」と言い

ながら腕をまくって見せる。その腕には、奪い取った腕時計がずらつと並んでいた。彼らにとつては貴重品だったのでだろう。昼間はまだまだ良いとして、夜暗くなってからの略奪は危険で、それを思うとおちおち眠ることもならなかった。そんなことで、日本居留民で自警団を組織することになったが、日本刀を持ち出す人もいた。しかし相手は自動小銃が武器であるから、日本刀では刃が立たないばかりか、かえつて団員に余計な危険を及ぼす恐れもあるから、止めてもらうというひと幕もあった。そこで金だらいか鍋とか、たたけば音がでる物を集め、それを持ってソ連兵が押し入った家の前に集まつて、じゃんじゃん鳴らして大声をあげるといふ方法をとつた。ソ連兵も公然とできる行為ではないので、落ち着いてはいられないだろう、驚いて出て来たら、こちらは「わっ！」と声をあげて逃げるというやり方である。誠に平和的な方法であつたが、それでもけっこう効果があつた。私も若かつたので自警団の一

員として駆り出されて、毎晩のようにこの方法をやつて、ソ連兵の追い出しを図つた。一応、ソ連軍自身による取り締まりも厳しくなり、秩序も回復してくると、だんだんとソ連兵による夜の略奪も収まつてきた。

四 早期帰国の夢

ソ連軍による略奪騒ぎが収まりつつあるところに、葫蘆島ロトから日本人送還の船が出ているという、うわさが流れていた。もしそれが本当だとして、奉天にいた方が早く帰国できるのでないか、大連に来たことが間違ひだったのでないかという気持ち、日ごと夜ごとに高まつてきた。しかし、もうそのころになると奉天に向かう汽車はなかつた。

半ばあきらめかけていたころ、たぶん終戦後一カ月ぐらい経つていたころと思うが、あちらこちらに避難していた満鉄社員を、以前の職場に戻し始めた。そのための列車が奉天に行くという情報を、満鉄幹部の息子である友人から聞き、矢も盾

もたまらずに、同じ気持ちのT君と二人でその列車に紛れ込んで乗った。目立たないように身をかませていたが、やはり見付かってしまい途中で下車するように求められた。ここで下車させられたらそれこそ命が危ない。機関士に頼み込んで命乞いをし、結局そのまま奉天まで乗って行くことを許された。

しばらくぶりに見た奉天駅前、変わり果てた姿が広がっていた。駅前の広場を囲むように立っていたビルは、焼き打ちにあったのか、無惨な姿をさらしていたし、駅前広場は黒い満服を着た人々で埋め尽くされていた。この人込みの中を果たして無事に通り返られるかどうか不安にかられたが、T君と二人で手を組み、歩調をとって広場を横切ることを決心した。背後からリュックサックに手を掛けられたらそれこそ終わりだが、幸いにも群集は道を開けて通してくれた。日本人街は、見た目には落ち着いているようだったが、たまたま見掛けた日本人女性は頭を丸坊主にして

いた。ソ連軍進駐当時の恐怖の実態を物語っているようだった。

このような曲折を経て、父の友人であるM先生の家に転がり込んだ。話を聞くと、葫蘆島からの帰国というのはまだまだ先のことのようにであった。このままM先生の家の居候になって徒食を続けるわけにもいかず、働かざるを得ないことになった。人伝に、ホテルの従業員の口があることを知った。当面ロシア語を勉強しながら、そこで働くことにした。そのホテルは大きなホテルで、ソ連軍の将校の宿舎となっていたので、ロシア語の勉強もできる場であった。

占領軍の将校である人たちでも、ときには酔っぱらってトラブルを起こすこともあった。ある夜、客室係の見知らぬ男が、私たち従業員の控室に入ってきて、「将校が何か言っているのだが、ちっとも分からない、だれか来て話を聞いてくれ」と言った。主任が「おまえはロシア語を勉強しているのだろう。手伝ってやれ!」と言った

が、私には嫌な予感がした。しかし主任から指示されたら嫌とは言えずに、止むを得ずにその男と客室に行った。

ところが、将校が言っているのは「女」の要求であった。こうなったら話が分からないような顔をするのが一番と思ひ、首を横に振り続けたが、相手もそうなると一生懸命に分からせようと、万国共通の仕草で訴えてくる。そんなやりとりをしているうちに、客室係の男はいなくなってしまうた。たぶんその男が、ホテルの入口にいるカー・ペー（軍警）を連れて来てくれるものと心待ちにしていたが、いつまで経っても戻つて来ない。そのうちに将校もだんだんといら立ってきて、とうとう拳銃を抜いて脅かし始めた。困ったとは思つたが、まさか本当には撃ちはしまいと高をくくつていたが、突然窓を開けて二発、空に向かつて発射した。これは本当に撃たれるかもしれないと、内心真つ青になっていた。ところがこのことが幸いして、拳銃音を聞いたカー・ペーが部屋に入っ

て来て、将校に何やら質問を始めた。将校は観念したのか弁解していたので、そのすきに急いでその部屋から逃げ出した。

控室に駆け戻つたが、控室は中から鍵を掛けていて入れない。大声で叫んでも扉を叩いても、返事がない。こうなつたらどこでもよいから逃げ込める所と、一部屋ずつ叩いたが、どこも応答がない。最後の部屋は布団部屋だったが、幸いにも鍵が掛かっていなかったため、これ幸いとばかりに布団の中に潜り込み、一夜を明かした。

翌朝、早速主任に「なぜ開けてくれなかったのか？」と詰問すると、主任は「おまえのうしろに露助が立っていたらどうする」と答えた。部下を見殺しにするような上司の下で働くのは真つ平だと思ひ、ホテル従業員は辞めた。

だが食べなければならぬので、その後いろいろな仕事をした。そのころ奉天では、日本人の多くは売り食うりけいをして生活していたので、これを街頭で売る委託販売という仕事をした。委託販売

人が自然と集まっている露天のマーケットがあったが、私もそこに行つて預かった羽毛布団などを売っていた。そこでは集団暴力スリの被害に遭つた。若い中国人五、六人に取り囲まれ、預かった商品をいじり回す一方で、私のポケットに手を突っ込んで、持ち金を奪うという荒っぽい手口であったが、私もとうとうやられてしまった。その後、委託販売人もそれに対抗する手段を考えて、集団的自衛をするようになった。

それ以上に危険を感じたのは、薬であった。大病院辺りから横流しされたと思われる薬を、街頭で売る商売があつた。これは危険を伴っているので、利鞘りざやが良かった。しかしこの仕事を始めるとすぐに、明らかにやくざ風の中国人がやってきて、買うわけではないのに仕入先をしつこく聞いた。それも一日に何回も来て、さらに毎日寄つて来た。そのうちに、こちらは身の危険を感じて止めてしまった。

その後、M先生が豆腐屋を始めることになり、

そこで働くことになった。中国人の豆腐屋が、先生の教え子の父親だったので信用できるということだったが、問題は作っている場所だった。そこは、城内と呼ばれる古い中国人街で、そこまで買出しに行かなければならなかつた。私の仕事は、毎朝自転車で行復約一時間の豆腐運搬であつた。早朝決まつた時間に、日本人のだけ一人いない街中を通るのは、気持ちの良いものではなかつた。しかし豆腐屋のおやじは非常に親切で、仕事は確実であつた。中国人は、本質的には個人的な信頼関係を大事にする民族である。

五 再び大連へ

こうしてあつという間に三カ月が過ぎて、昭和二十年の暮れも近づいてきたが、葫蘆島からの引揚げの話は一向に具体化しなかつた。大連から内地に向けての密航船が出ているという、うわさが広まってきたのは、このころのことである。

多少の危険はあつても、一日も早く日本に帰りたいという思いがつのり、再び大連に行く決心を

した。当初は一人で行くつもりであったが、ソ連軍司令部に移動の許可証をもらいに行ったら、たまたまそこで同じように大連に行くという同年輩の日本人が居合わせていて、二人で一緒に行くこととなった。

大晦日の十二月三十一日、奉天駅から大連に向かった。この人は、旅順工大予科の兄と同級であったが、後日私と同じ仕事をする事となった。世間は広いようで狭いものである。その日の朝、満服を着込んで駅に行ったが、人が大勢で改札口までたどり着くのが大変だった。通りかかった日本人の駅員に窮状を訴えると、黙ったまま私たちを駅員の通路からプラットホームまで案内してくれた。これは大変に有り難かった。しかし、遅れてホームに入って来た列車は、どの車両も満員で、乗降口のステップまで鈴なりの状態だった。先頭車両の前だけは割合に空いていて、そこには警備のソ連兵の交代要員が乗っていた。そこでソ連兵に向かって、知っている限りのロシア語

を言い並べて乗せてくれと頼むと、連中も退屈していたようでOKしてくれた。

その当時、大連では水が悪くて良質のウォッカができないので、奉天のウォッカは高く売れるという事で、当座の資金用としてリュックサックに詰め込んで持っていた。そのリュックサックを通路に置いて、それに腰掛けて幼稚なロシア語で話を続けて、追い出されないようソ連兵の機嫌をとっていた。

そのうちに、ソ連兵は一人降り、二人降りして、私たちも座席に座ることができたが、車両のあと半分には中国人がぎっしりと立っていた。大石橋駅で手荷物の検査があり、ウォッカは全部取り上げられると警告されていて注意していたが、座席に座ったら今までの疲れが出て、知らぬ間にぐっすり寝込んでしまった。気が付いたら大石橋駅は通り過ぎていた。

何事もなく無事に大連駅に着き、ソ連兵とも別れて改札口を出たが、それでも手荷物の検査をし

ていた。せっかくここまで来て取り上げられるとは情けないと考えながら、列に並んだ。検査は、二列に並ばせて一人ずつ荷物を開けさせられた。

私の前の人の検査が終わり、横の人の検査が始まった。私はリュックサックの口を開けて待っていたが、前の人リュックサックを閉めて背負い始めたとき、私も一緒にリュックサックの口を閉めてその人に合わせて背負い、その人にぴたりと寄り添って歩き出した。ほんの一瞬の行動だったが、うしろから声を掛けられて呼び戻されるのではないかと、電車道に出るまで気が気ではなかった。

こうして、昭和二十一年の元旦、再びK君の家に転がり込んだ。K君は快く迎えてくれたが、私のリュックサックの中身を知ると、眼を輝かせて「これで正月ができる!」と言って友達を呼び集めて、新年会が始まった。なにしろ物のない時代であるから、みんなは大喜びだったが、私にすればあれだけ苦勞をして持って来た資金源が、あつ

という間に元も子もなくなってしまう、酔うにも酔えない複雑な気持ちになっていた。

六 バールン業

K君に密航船に乗りたいという話をする、そのことについて詳しい人がいると言つて、元船長だったUさんを紹介してくれた。

年配の元船長は、「いずれ近いうちに正規の引揚げが始まるから、今は密航などという危険な行動は避けるべきだ」と言つた。友人たちも皆反対であつた。

K君の父君は医師で、当時は軍属としてジャワ島に出征していて留守だつた。母君は積極的な方で、バラック建てのバーを開き、ソ連兵を相手に営業していたが、その共同経営者がUさんだつたこともあつて、結局そのバラック・バーでバーテンとして働くこととなつた。

バーテンとはいつても、シェーカーをふるということはほとんどなかつた。客は、大連三中跡に進駐してきたソ連軍戦車隊の隊員が中心であつ

て、彼らはスタカーン（小型のコップ）についでウォッカをひと息で飲み干していた。さすがに喉が焼けるので、顔をしかめながらロシアパンを鼻に当てていた。それから食事という段取りになった。バーテンの仕事はというと、酒や料理をサーブするということよりも、酔っぱらった兵隊をうまくさばくことにあつた。力の強い連中であるから腕っ節ではかなわないが、そこが頭の使いどころである。

なにしろバラック建てのバーであるから、来者は兵隊が多かつたが、将校もけっこう来ていた。経営者であるK君のお母さんは、ときどき若い将校を自宅に招いていたが、将校たちはママが立派な家に住むインテリだと知ると、何となく敬意を払うようになった。そんなことから、戦軍隊の隊長であるモロゾフ大佐の何かのパーティーに招待されたこともあつた。また、老兵ばかりでときどき食事に来るグループがあつた。そのグループに一人の若い男がいて、支払いはいつもその男

がしていた。どうもこのグループの兵隊は読み書き計算が不得手のようで、この若い男がみんなの金を預かっているようだった。まじめな男で、支払いもきちんとしていて良いお客だった。

ある日のこと、その若い男から私が金を預かり、グループの飲食代もそこから支払つた。その都度残額を知らせるように言われたが、その理由は兵舎の中に現金を置いているのが危険だからとのこと、仲間の兵隊よりも私の方が信頼されているというのは、悪い気はしなかつた。

昭和二十年の暮れごろまでは、世間がどうなつていたか、情報もさっぱり入らなかつたが、年が改まり二十一年になると、急にいろいろな話が耳に入ってきて、葫蘆島から引揚げが始まつたことも知るようになった。

兄は終戦以後奉天で暮らしていて、私が奉天に行つたときはしばらく一緒にいたが、私が大連に移つても奉天に残っていた。そのため二十一年の早い時期に、葫蘆島経由で帰国していた。何の

ことはない、私は帰れないところ、帰れないところと歩いていたことになる。二十一年の暮れのころから大連からも引揚げが始まった。

七 帰国と復学

引揚船に乗せられる荷物は、自分で持てるだけの物に限定されていた。多くの人は布団袋に全財産を入れていたが、乗船前の荷物検査では三十メートルぐらいの距離を、引きずって行った。不運にもソ連兵の検査員に捕まると、中身を開けさせられて大事に隠していた物を取り上げられるおそれがあった。

乗船前夜に、引揚者団の幹部に呼び出された私は、ロシア語ができることから、ソ連兵検査員の買取要員を命ぜられ、分厚いソ連軍軍票の束を渡された。荷物検査場では私が先頭になって、三十メートルも離れた向こう側に荷物を置くのだが、捕まっている人がいると、検査員の左手に札束を握らせる。ソ連兵は指先で札束の厚さを確かめると、黙って荷物を通した。検査員にとっては慣れ

たことのようにだった。こうして金のある限り買取をしたが、ロシア語などは全く必要がなかった。

これだけのことならば、私も良いことをしたという思い出になるところであるが、その後には納得のいかなないことがあった。それは乗船後、引揚者団の幹部の姿を見付けたので、あいさつをしようと近づいたら、先方は顔を合わさないようにして向こうに行ってしまった。それも一度ならず会う度である。もう引揚船に乗ったら私と関係を持ちたくないという感じが、ありありと見受けられた。あの連中は、何か別のたくらみがあつてか。ひよつとすると、私は何かの道具に使われたのかもしれないと思うと、まことに後味の悪いことであつた。この出来事を除けば引揚船内は平穩無事で、順調に佐世保に向かつていた。

八年ぶりで見る日本本土の緑は美しかった。

両親たちは、昭和二十年の春に内地に戻つていて、父は佐賀県内に新しい職場を得て働いているはずであつた。しかし二月十二日に佐世保に着い

て、収容所の壁一面に張り出されている連絡票を念のために見たところ、何と熊本県の山の中に転居していることを知った。家に何か事情があったかどうか分からぬままに住所を頼りに尋ね尋ねて、やっと我が家を探し当てた。夜はとつくに更けていた。

その辺りは真つ暗闇で、入口が分からずに土間続きの隣家から入ってしまった。家は古い農家造りであった。父と母は、薄暗い電灯の下の囲炉裏端に座っていた。百姓の老夫婦に変身したかのような光景だった。「ただいま！」と私が声を掛けると、二人共しばらくは声も出さなかった。「男の子を二人残してきた。一人は帰らなくても仕方がないと思っていた。二人共帰って来て嬉しい！」と、しばらく経ってから父はぼつりと言った。

父は終戦と共に職を辞し、「百姓になる」と言つてこの開拓部落に移つて来たそうだ。もともと定年になつたら百姓をすと言つていたから、

彼の美学を實行したわけであるが、この開拓部落の生活は並大抵のものではなく、父自身もこの生活をいつまでも続ける自信はなかつたと思われる。

百姓をする父を手伝つて肥たごを担ぎながら、私は進学を志すのか、このまま家族を助けて働くのかと迷っていた。その年の三月になると、旧制高校が復員学生などを対象にして編入試験を行うと発表した。進学することは、両親や妹たちを見捨てることになるようにも思えたが、だからといってこのまま百姓を続けても、きつとあとで後悔するだろうとも考えた。悩みに悩んだ末、一度だけ進学に挑戦してみたいと決心した。一度だけの機会ならば、東京の名門校にターゲットを絞りたいと思い、父に打ち明けた。父は既に私の気持ちを察していたとみえて、黙つてうなずき、母はなけなしの着物を売つて汽車賃を工面してくれた。今も、このときのことを思うと胸が痛んでくる。

アルバイトをすることには自信があったが、長期間の空白の後の編入試験には全く自信がなかった。試験のときは惨憺たるもので、進学の見込みは消えたかに思えたが、結果は幸いにして合格した。

学寮に潜り込めた私は、育英資金とアルバイトによって生計を維持することとなり、大学に進んでもこの生活スタイルは変わらなかった。早く大学を出て、自分の給料で生計を立てることを楽しみにしながらの学生生活だった。引揚者としては順調だったといえよう。

兄の場合は、私ほど順調ではなかった。兄は高等学校に編入後結核に苦しみ、大学進学が遅れた。そのうちに、父は百姓をあきらめて熊本県内の福祉施設の園長になり、それにつれて母の生活もそれなりに安定してきた。

引揚者としての記録はここで終わることにするが、私の大学卒業後の職業生活もおおむね順調に推移し、近く終着駅に達する。このような時期に

あの激動の時代を回顧し、記憶を新たにする事ができて感謝の気持ちである。

あとがき

平成五（一九九三）年九月、縁があつて奉天、大連、旅順を訪れる機会があつた。

奉天では藤浪町の我が家らしきものが見付かった。周りの古い家は壊されて、新しいアパートが建てられていたが、その一角だけは古い家が残っていた。門があつた跡は塀になっていて、玄関も改造されていたが、確かに我が家の造りが残っていた。何度もその辺りを往き来していると、若い中国人が出て来たので、事情を話したら、中を見るように言ってくれた。その男は新婚で、八月からここに住んでいるとのこと、好意に甘えて中に入れてもらい茶をこちそうになったが、内部は改装されていて私の記憶とは全く違っていた。お礼を述べて辞したが、見なければ良かったという思いだけが残った。

大連では静浦に行つたが、あの一年間働いたバ

ラック・バーがあった場所には新しいアパートが建っていて、昔日の面影は全くなくなっていた。休日には蒲の穂を使ってシャコを捕っていた静浦の海岸は、すっかり埋め立てられて中国版ディズニールランドができていた。

K君の家に行く登り坂の入口には門ができて、「ロシア海軍療養所」と書いてあったが、衛兵がいるわけでもないので、坂を登ってK君の家の前まで行った。外観は以前と少しも変わっていない。あのころの出来事が次から次へと浮かんで、しばらくはその場を動けなかった。今は、K君もお母さんも亡くなっていてこの光景を見ることはなく、半世紀の月日の流れは無情だった。今、この家で暮らす人には、私の胸中を去来する感情を理解できないであろう。あの激動の時代の記憶は、我々の世代と共に消えていくのだ。

こうして、この年の旅は私にこの世のはかなさを教えてくれたが、同時に私が生きた時代の証に、あの体験を記録に残しておきたいという気持ち

ちを起こさせてくれた。

私とその家族の戦後は、全体としては幸運だったというべきであろう。もつと、もつと悲惨極まりない経験をした家族も多い。「引揚げ労苦記録」を残すには資格が足りないかもしれないが、私の人生にとつては最も重要な時代であり、出来事でもあり、記録に残したいと考えて筆を執った次第である。

終戦に伴う二度の長旅

東京都 小川 国 壽

一 出生から終戦まで

私は昭和六（一九三一）年二月二十四日に、父正香、母スキの五男として中国の青島市チンタウで生まれた。家族は八歳上の長男豊寿、七歳上の次男浄寿、五歳上の三男康寿、二歳上の四男彬寿、三歳下の六男恒寿、五歳下の捷寿、七歳下の八男敬